

～臨床情報・検体の研究利用に関するお知らせ～

『研究課題名 卵巣刺激低反応予測患者に対する Antagonist 法と PPOS 法の ART 成績を比較検討する後方視的観察研究』

研究機関名 東邦大学医療センター大森病院

研究責任者 産科婦人科学講座 職位・氏名 講師・福田 雄介

【研究の目的】

近年の晩婚化により、生殖補助医療(ART; assisted reproductive technology)において、採卵のために多くの卵子を獲得することを目的に行う卵巣刺激に対して、卵巣の反応性が不良である方(POR; Poor ovarian response)が増加しています。POR は、以下の 3 つの項目のうち、2 つ以上を満たす場合に診断されます。①年齢が 40 歳以上、または卵巣の手術既往や卵巣子宮内膜性囊胞(チョコレート囊胞)がある方、②卵巣刺激に抵抗性の方(卵胞がなかなか育たなかった方)、③卵巣予備能が低い方 (AMH が低い方)。

POR の方の卵巣刺激においては、より多くの卵子を獲得するだけでなく、採卵前の早発 LH サージによる排卵をいかに防ぐかが非常に重要な課題となります。早発 LH サージを防ぐために 1990 年代に開発された Antagonist 法という卵巣刺激法はその有用性の高さから今日まで広く使用されています。一方、2017 年頃にプロゲスチン製剤による早発 LH サージの抑制を行う PPOS 法(progestin-primed ovarian stimulation)という卵巣刺激法が開発されました。この PPOS 法の ART 成績や早発 LH サージの発生率は既存の Antagonist 法と同等であるという報告が散見され、当院でも 2018 年頃から PPOS 法を行っています。

Antagonist 法では卵巣刺激のための注射に加えて、採卵直前に最大数日間の GnRH antagonist 製剤の注射をします。これに対し、PPOS 法では、卵巣刺激を開始する月経 3 日目から採卵日を決定する日までプロゲスチン製剤の内服をします。PPOS 法は

Antagonist 法と比較して、低費用かつ低侵襲であることが最大のメリットです。

本研究では POR 患者に対する Antagonist 法と PPOS 法の ART 成績を比較すること
で、POR 患者に対する PPOS 法の有用性を明らかにすることを目的としました。

この研究で得られる成果は、当院のより安全で質の高い ART を提供することにつなが
ります。また、医学学会や学術誌への公表を通じて、わが国の ART 提供体制に有用な疫
学情報を提示することとなり、日本の ART の安全性の向上に貢献します。

【研究対象および方法】

この研究は、東邦大学医療センター大森病院倫理委員会の承認を得て実施するものです
(承認番号)。2017 年以降 2020 年までに東邦大学医療センター大森病院リプロダクシ
ョンセンターにおいて、Antagonist 法または PPOS 法で卵巣刺激を行い、採卵を行った
POR 患者を対象とします。診療録(カルテ)から抽出した治療経過をもとに治療成績を
解析することにより、当院における ART 成績統計を明確にします。

【研究に用いられる試料・情報】

情報：不妊治療経歴、妊娠経過歴、妊娠病歴、子宮鏡検査、超音波検査、血液検査、病理
検査、X 線画像、CT 画像 等

【個人情報について】

研究に利用する情報は患者様のお名前、住所など、個人を特定できる個人情報は削除して管
理します。また、今回の研究で得られた成果を、医学的な専門学会や専門雑誌等で報告する
ことがあります、個人を特定できるような情報を利用することはありません。

本研究に関してご質問のある方、診療情報等を研究に利用することを承諾されない方は、下
記までご連絡下さい。その場合でも、患者様に不利益になることはありません。

【連絡先および担当者】

東邦大学医療センター大森病院 産科婦人科学講座
職位・氏名 講師・福田 雄介
電話 03-3762-4151 内線 6670